



中村俊定文庫
文庫 18
326



憲曆四甲戌春

式百竹查

信仁科

八菊集
文曉

二林庵園主人



表もさきさきの次み升庵の
草庵をそくけふ信濃の仁科なり
文暁八菊のふん子なるまふは
伊勢糸文の廊けなるまふ
おこの唯一まふるまふとく
まふ風雅のふんもまふるまふ
おこのまふの祇保とくまふ

中村修定文庫



こちりのも唯一まふるまふの
道明やうま線もをうけ

五升坊

文暁

子自悟ハ茶徳のやれおまを

東徳

茶産此ほりてかよふこ

山周

まの書ぬ先うう月の東け

里中

二百十日子 萩もこころ次

萩先

悟りともかハたれ和当換

芦江

聲まうひまら 忍辱して八道

里暁

中俣まゝとく祭の簾よきあけて
 かこく日押のてりかざりと
 葉うら水よとこし一柄の咲たひ
 むらりあゝぬ敷と埒下り
 若ぬりしを母へさうさぬりなう
 穴のつりも遠ふおまへ
 宮ふ建りえりま柱けつり立
 今とてなまありこきせりう

宇ね 葵的 八菊 随午 文史 巴夕 曉 坊

相性も侍業こし一のぶとく様
 十六日ハナリよれ縁日
 けやれ月夜とくふもあまふ子
 心身をあけまハ露うらうく
 ちよとさけく恥まハなぬ二本指
 希子神くもよをせしいまこ
 窓えよきうくおのちりつり
 星子歌も海うぬ 表

周 隠 先 中 里 江 内 ね

凡雅ハ二十年の修竹地よもれく文通の
えしよも教はんをくひ表六十余里れ
本芳路を流く五并宗原の教よとくくぬ

劫くもて棟えんや山さくく 文曉

持ふ自らとハつて子線多 八并坊

五并原れ閑居をくゆくねくえもる哉
常くくお静なりもいりの華なるん

旅の氣もち法く里や表の由 八菊

爐もぬさくくえあきせん茶 五并坊

信仁科らりそくく友のみ并庵を訪ひ
まりくく風子を柳並園よれく

駒に免く持くさくくの美く哉 馬佛

介あくくくよあむむ日の影 八菊

ちくくく店の書海苔くれ神く 五并坊

並りくく水くくく計よ氣きひ 文曉

ち法も先ハ月夜の中なるく 東隠

走りちく免く系信く 見免

詞考略

雪の笠屋を免えや竹の奥

葵内

宿ハ日影のそれまきま

文暁

身代もすえおろく暖り

八菊

仲人の嘘れちろくあふても

東隠

夕月も暮も忘るく次摺のく

五井坊

泣じく啼を馬追も啼

里中

詞考略

相生の長名もこれく雲の影

東隠

霞なうくもくくさあり玉

八菊

長さの吐くも八重も表更く

葵内

株深れもはむれ鬘彫

五井坊

飛のいそぐおちくくと釣の月

文暁

萩のり露ノ萩れ下家

叶周

詞書略

小西郷

馬小

其笠をなめてもろく茶の煙

口思くちり長の夕棠

文曉

鶯の茶いろ子借もそりく

八菊

仁科のふん士を我山居子折さゆりり

おこよるるさ嬢於戸隠のわいもあはれ

洞菅午

おのふれふ子ハ似まや菊ふとも

茶の香見のようさニ方椽

八菊

おしげをぬけえんも長先さき

文曉

又ら親ハ仁科のふ士をるくそりり

菊庵ハもくぬけり

黒神

瓢五

もてなまじ梅もさきりの垣あ

ぬけたるふ藤もくそれ

文曉

長父入ハもりりお茶女子長居引

八菊

詞多略

山縣

粟儿

乙よりよりそ声くれー後りけ

風も柳もやまきさあゆ係

文暁

中日の談義もあつりく

八菊

百韵表

波阜

仁科のあ風士も長秋親を訪れけり
雅英ハ何の端もあ山の麓もとてなり

見せまやれ松のみどりさむまふ 体太

つさぬ菊ひもは端あふ 八菊

菽入もりようかふ供つとく 文暁

ほんも子女のし縁日也 東波

殊ゆせも介のさるう落さる 辰光

白ゆも髪も落し次えん 春詠

月もまゝの海もぬ先の草葉も 髪二

秋ハ秋のくれも 花小 莊平

曉菊のあふ子に値偶一なる更會の
所もなぐあふれを送るこころ

笠松 抄疏

常も又あふはさびくとも

見之ふ笠も今ノ里の表 文曉

漲ひはふらうらうらうらうらうら 八菊

改田かりに桂傍ハ善光寺訪めおろしを
更りも満くはは六のハ安よ止宿し

心吹やふはははひも水々次 文曉

掃ぬをくし見之ふ線く 改田 八桂

悟りくらんく居れを暖り 八菊

仁科のあふ士子草庵と 園

らふうしよとれくもや夜の家 知六

そもはひ子善かしむ表 八菊

里路もふの善徳をささぐ 文曉

信のふん士子

大垣

柳家を訪とく

隆五

春のさだのくつらや桃のさく

まうけ祝けんこちもこさ

文暎

出代のちれ子赤表忌かさりく

八菊

まお町のかさく口はな

風朝

我えく切篋さくらと暮の月

半意

秋おもくつさ虫のいろく

左付

餞別

曉菊のふん子陸月未の改事芳流は流家
書を踏まけく風雅の旅床思ひきり
しつたのあらさく此流くさるく
不くの更令も走しつて次えらうは地六
同門の固く親交なれはしつて草の
しつたのあらさく思ひ流れくさるく
此俄んたる流家の筆さるがしつて
思ひ送りく

海りまゆ

長いりまゆく茶の壺

五林坊

尾張

一のよなり梅月室は山若く

八菊

宵闇もよもりぬくも柳の宿

ぬふじ磯のあまをせふ

一云

春和

今ゆりにも一歩も音は水に

文暁

名古屋

重今の期初ありく

坐忘

いく表も又もよ見ハ若くも

抱ひもよれ一茶も茶の友

八菊

住くも意をこもよ配く進く

文暁

川へなりこさちもかけ橋

九甫

いへ世界を度ふ長月の月

友九

ぬさ控たうく心まを尻友

春江

詞書略

果

昌阿坊

笠の裾もやうー二夏の海苔の真

やうらぬらうくひとの宿

文曉

水さ口もはらく波と書れが引け

八菊

かりそへ事このもきれぬ話

川巻

松の枝のゆれを於る月のあ

花イ

落もまじく外屋夏の秋

於西

詞書略

果

丁牧

梅うきやぬさこころ風も池まがり

日水もさうく椽の見成

文曉

桐うの穂味ふせんやよまよとく

坐忘

つげうけく人かゝぬ子方限

八菊

夕月も通より盆さこほしうけ

竹夜

夜たぐも窓よ来とく虫の換

夜光

きさくまの未はくい仁科の事よ
あつとく

同

節溪

いさ同ふまや志かのい免様

あふささいさのいもけ袖

八菊

まろきくおく窓のうめ拾く

文暁

洞中略

同中下

馬六

朝起のいあり窓子雄子此声

配けハ白ふ梅のうら住

八菊

か好このお代をいん拾ふ拾く

呂朝

くりまぐらふい口をくい癖

文暁

おまこの香清も月見あをいん

字卜

まも氣も免子あくぬ杖定

例詠

あき庵を存子いんいんはく
風粒まもりりあく

文暁

雪の起りいん子并の宿

あつとく雪のあつとく

あき坊

あまの程あまふもりり

八菊

伊勢

素名

古秋とてなほり口ハ風吹浪あはれとく
名子あふ七里の海船もくえをくわく
海人の声もなれりきき昔ふハ今今の
候しもあるまきなきは秋夢ハ水も

八菊

なちうくれじやハのれをく水

春の柳れうけやまきさ風

菱士

かふ障子の水を表は氣のを水て

花琉

こやくくいへも膝をもくらす

帆十

静ハまきくかんさう昔の月

文曉

かちぬ秋を色くぬ松

棠故

毛揚まへまき免う水く

文曉

先よのび柳のうけやほをささ舟

音もくもけいあへん神和

帆十

は季あや馴條の里くむりりく

八菊

包ひくまきま風呂あはある

菱士

いりうく掃子え床の疾ハな紙

棠故

好むくやうの者よくをん 物琉

待宵も夜雲よあはれと後おの意 碎丈

紫うハのへまをぬ氏 神 芦三

信州松本武門

いせのこゝろむらり 山志
あかきを見送りく

まほひゆけ今候萩も免くじ時

とま水ぬ思よ又りく家 八菊

おろりには風呂あつとこれさけて 文暎

吟行歌 首途

梅の香もこれ一 首途の笠子先 八菊

むすくも家元なりとよ一 首途よ 文暎

陰月亦八の八元も曆もくもりなきさ衣のなりより
けの先達系里を旅さゆりさよ家本神のよハ

仁神の家社を水た西深好音とく長途

百里の空程をぬ流りまうりり
世震むくもま向もこれ一 林の心 八菊

松府城南の天神文、訪く
花梅の折々いものうん神のを 文暎

園はまき
園はまきやとく免く 雉子の声 全

柳沢まき

雪とけの川やさくられ新ハマ

八菊

春空とさあそへや雪の柳沢

文曉

其夜ハ江川の雪後亭より見らぬ水乃の氷も
やみうらむ水とありの結氷は雪とあり

旅の日はを考ふよりわが神午なり

その川午より先事於るさの雪

文曉

冬井詠まき

神午もさむいも井 詠江

八菊

ふか名はあふけをいよけりしはつかり危き

事よやく各もいよけりしはつかり危き

いよけりしはつかり危き

くちりよきもあけなふらふものえらふは

連高あひのゆきよもあけなふらふものえらふは

かそろいよけりしはつかり危き

あむらんよけりしはつかり危き

たりの山もハ数千丈の岩壁は松の根志く

沙雪れ白くあけりしはつかり危き

なみの曝布は雲なりと其ま後ハ岩をめぐり

本をよめりしはつかり危き

蜀乃のゆけりしはつかり危き

時ハ万丈もゆけりしはつかり危き

くちりよきもあけなふらふものえらふは

八菊

小東の眺をいふまゝりあゝ富士の峰を仰ぐ
霞はりにて英氣をあらはしゆく
筆は乃ち波をよどむのうらみありと見定む
花の紅は使はるるをわらうり口わらひハ
いふをよめ

野々依旅のいさよや口より山 八菊
霞はさくもくさや 口わら山 文暁

さし井とてふは石研ありと
おきけ旅のうらみと
いさよひいんを忘る井のうらみ 舟文甲斐
さし井や永き口より山
おのゝろはさし井とてふは石研ありと 八菊

尾城の旅をいふまゝりあゝ富士の峰を仰ぐ
霞はりにて英氣をあらはしゆく
筆は乃ち波をよどむのうらみありと見定む
花の紅は使はるるをわらうり口わらひハ
いふをよめ

かゝいれくおはるやまゝいふは
長きい定む見えりの橋 八菊
あのをいふもいふ子の風中とと 文暁

一文の梅月主人をいふ
梅の香をいふ人や月の影も 文暁

九流園のいふまゝりあゝ富士の峰を仰ぐ
道草のいふみやけなるいふは
いさあゝいふは橋のか 東隠

梅の園をいふまゝりあゝ富士の峰を仰ぐ
梅の香やいふいふは
梅の香やいふいふは 文暁

池をよせえく 表の入お 馬佛

黄鵠を伴の教戒ありをこしハハとをの首よ

しと共人ハと年の子りさす十日世を去ぬぬ

そのや願ふ共事はるも思ひもいせく

かけろややまおもいけのまへに 文暁

常の若やいれいさもおなすも 八菊

温塔をぬしもんととくくいさのたを

ほいひと

志くは真のぬるやふさく 文暁

梅の佛の碑あよりこまうと

ゆくとふじうと考ハ一樹のまふ 八菊

はら八洞の菫午士の先達れく山房のたれを奉
なくと

こちくと同ふや柳のふき道 八菊

し考の声もまへに後りうけ 菫午

逢おま口水ととく窓ゆと 文暁

長良ま

川舟のりゆもありとくさくか 八菊

波山下子あまをさかーいさ

思ふゆりや榴糸の松は雄の声 文暁

大垣桃家まのりま

掃込ぬけとくハ体む小蝶が 八菊

途中吃

峯ハまゝい雪うくむの刻ほくけ 文曉

七族の神の改祀を園の御講堂より免うれく

くう水ありく線やさくくの陰よ又 文曉

途中吃

雨晴やどよハいさ風なうく 八菊

お梅や晴くふりをめくけや 文曉

丸流園は二十口あまりの追ふもありの多様は

あふぬものくくそそりハ流文も妙さかーく

くふさうりおやうらみむくくと 文曉

仁科のふん士濃尾勢のゆ柳れ冷うくけ
侍侍く

遠ふ咲むもさくろやゆりふけ 池田連中 系滝

笠のあふふふれ茶さくやけが 桃正

其笠を線もさくろやむもとり 曉鳥

雪の被ふも肥てや 旅もとり 和千

旅戻りさくろひあふふれ山 青州

洞書略

夢うけく今あ航の長良川 松川連中 野吏

笠の裾もやつね旅やまの雪
海雲子袖よりかへともや旅はくし
松波

帰庵賀

茶の香やたくと免と神やけ
鳥孝

常子口忌いかなし旅の笠
鳥孝

旅波や見なると桃のじいほ
之深

詞多略

狂言人旅の袖もささく
東新田連中
兵弁

侍法

仁科連中

あけくもまのねを体免もや夕をり
定外

侍りけし先船くましく入ふ
桃仙

おしひや栢の柳もまはさあひ
賢枝

何ふくのむもやゆくと海
信栢

先ころん英濃の茶つとをさな
一ニ

侍りよも帯八入まし茶の雪
柳波

ふもま色先くむのしひほ
羽山

おしひひ子ふけりきとくしき
変雨

長旅も待はこらへ柳の那
仙児

脱くそ木の香もそ旅ころも
仙童

おしひひや駒もも今拂まも
赤麻

おの味もそや藤の立之也
里由

まなみとや松子旅むひ
菊童

詞書略

旅の氣のしとあはほくく拂は
伊勢山田
左記

は長あまのふとれ口ハいさく永くもはひひ
さや海解とサえり水も平も郊外ま
枝と曳とく
富苗

お通ひ子を見おれしむあけ雲雀

口黒くわく木の旅りさ
八菊

又しても娘身傍まあぬけと
文曉

海郎吃

家うらうらと咲もそひえ地の
文曉

ゆさ草のよらうらやうもそ餅
八菊

諸國集韻

春濃

東花坊

牛舌く糸声子晴立夕尸川

山縣

蒼ほと梅のいそぎや空のゆ

東羽

くも糸名もゆり名も糸のさく川

キヲ 芳麻

曇あもやれいろくやさの菊

一ノ 乙表

虫のまやさくをえ葉れ露えり

黒也 二粒

老子よれさくもさく水

加酒 李東

涅盤舎も位一とさえり榊川

竹鼻 達丈

糸書子我くわくくさく川

天徳 鳥六

移流くひの罪も晴らん糸の月

全 東季

鏡夜やほりくも位持入

全 呂周

冬振もあぬきあり松の風

富永 左澤

地一そこちく子秋もも程の如

兼山 湍水

表の底もあすれくや風中

ミタケ 百也

糸糸も二夜の晴ありやん糸

改田 仙夫

深心もや秋の表子かさり炭

郡上 眠魚

なしきまきく解あふらのぬき西ノ底水取
 大佛の鐘ハソ川な家秋の書中津川芦園
 志ろくく甘の穂定一後の月全森六
 独活城のゆきゆきくわや麻の角全里仲
 乳母うり知もあーりくくし雲物全羽紅
 追ふれ解ハわり長やりさの秋岩村お乙
 ゆきや柳をりハ持くゆき北方可儀
 とつくの雲と志く水く入口川笠松達交

我を相よ子雉子のほろく尾張百担
 志ろくくの雲と志く水く入口川アワタ阿當
 志ろく子志ハあれとも雉子の声全支系
 糠星のぬきく子天ゆりやう伊勢宇均
 志子奥の一ろもあきと牡丹全百茂
 名月や榊ものやく池れ面全王之
 松小家子糸もゆきゆき全旨坊
 一葉つ秋よものほく山張全免士

三秋五唱

東武

房く凡こく之くくさの秋 幸路
 今秋の多くもや芳れ地窓 琴吹
 夕秋の夕や折を免くけされ秋 山詠
 柳くま家雲の端やと別れ殊 文東
 秋秋れ秋とわゆるふお戸川 風詠
 鏡ついと嘆せふ心さくさ 出羽 風草
 松わくハ胸なくく柳の那 同秋田 伍良

時鐘の舟儀義なるさの月 酒田 芦雅
 名月や何知くいてもおと文 阿仁 伍中
 起く此をを鏡や如き流るさ 大山 如泉
 山地の思くぬ流るれさくさ 奥州 巴角
 卯の此れ音身やちねよ口傘 極楽山 岷青
 いさ青の園れるをハくさくさ 全 河津
 詩よあよなわくさく早もあお想 同町 松吾

まじの月もあふらんく時多川 周防 扇沼

月子らもー雲やあつた初時 去佐 舟延

山もいれりー雉子のほろく時 長門 中阿

初音やまゝさぬ草のくー 赤方園 泉式

凍ーさやにみ人の松れ 陰 器岐 葦花

ま川音やうさ松の葉よつむり 肥後 乙語

初音やゆぬ雲の途さく 豊後 西風

常や柔ハものまされ前小神 花洛 之風

くく拓の中子裏物ー後の月 越前福井 ちん坊

夕魚やさくーの波さ嘆きテ次 全 巴菊

山いり川種ハあつや道さく 全 可推

卯の葉北澄の具子ちりや夕鳥 同府中 栞鞆

若婦かーの笠や実一鳴さ見ん 同勝山 巴文

はくろりぬわくくーさ中菊 高柳 風琴

吹ぬ日ハおろき水ーく吹子 金津 秋六

芝ーちやも衣のあなり麻の声 敦賀 白翅

風子鳴家流もあつたゆゑに
紙中 岫邑

野火や幾人かあつても好むハ
同富山 倚表

山も川もささささささささ
致後新澤 可俵

赤宵戸の夜供持たせしもの
江西坊

祓えん流や堂はくまを消りて
文先

夜つ射ハじう一の神やあらもえ
全 以柱

魚の洞の月おと流ふあつたさ
村上 知来

芳名の子あつたのころうえ
地蔵堂 風壺

流しよとあやまののりこ
出雲 小湊

釣起の目よりりもなさを思
三ハタ 津虹

暎時のこまもあつた
墨 志風

横雲のな合せう一
五泉 朝後

短尺のささし
粟生津 一方

隈ささし
中ノ島 杜角

涼しさをあつた
長谷 起石

近きれ風子
妙津 番石

ふり髪子ゆかり 控ふる志麻川 會津 魯白

あけしきく 鳴や廊下ふくの音 東魚川 佐藍

新しん家の音き家さぬさび 全 竹以

まうけの駒りたや雪の葉のこ細 全 葩文

測り子為さるゆきすれろ柳 全 佳三

菊さきく八波の馬業うぬれ花 信松本 鯉尹

藤の糸や夕ア北あ志洗ひとを 全 朝舒

鶺鴒やちぬ丈夫も秋の暮 平谷 三呂

散ふ雪の跡くくえりもゆゆ 浪合 光石

蓬草の鴻へはらうー年北浪 飯田 松朴

系うく水や庭のちる北さえ不 斐川 加紅女

河骨のこもさる雪や水北月 全 三治

涼しき紙さうは音あそむ車 善光寺 猿依

おふ杭のあふゆかえり侍娘 仁科古人 學仙

かいほふをとおくーやとむ時鳥 全 友好

也全 修琴
 名月やちうくふくわいひ全 菊中
 朝衣のつらまや全 八角
 心も介全 百之
 ちのめれ仁科信 里曉
 卯のそれ以中
 笑草の飾りたえ坊
 福もむく

文字者效漢語路者從和夫為其体也則東
 花先師勿謂捨我國之易讀假名而學他邦
 之難知真名與者蓋憑副墨之子洛誦之孫
 為案内者唐麼大和麼何隔乎所謂風雅者
 以俳諧之文章可写於花鳥之情了則可達
 於醬鹽之用矣乎與所若者無于茲此辭則
 何条ナデラ 審カニサヤ 其趣乎左在者延享四丁卯春富
 苗文曉之二子扣黃鸝門止麼矣爾昨日之

昔與所成矣シカル在于八菊文曉之二風子遙志廬師之拜塔矣耳目肺腸モ下意シ馬車而復者真桑村之瓜可鎮鄭均之心モ麼袖蚊屋可明兼夜與所秋者長良川之鮎可慰張翰之思麼菽下露疝氣之冷麼無心元了則誘引哉稻葉山之春朝者彼造物者麼無盡藏之藏開也焉青野原之霞者不立去麼伊津貫川之水者スルシ迎會トシ茲寔曆四甲戌春

行色濃東山之狀川之流麼不似我鬼國之嶮岨何歎者有之風雅之情乎行無所牽止無所柅或遊無用之用乍度有用之用被笑左流關之朝寢被飽五竹庵之夜話與也好哉包得西山之暮色之袂子麼滿綴一冊題兩師之句於其首尾而例介調俳諧之時宜諸君子之句者不論其前後梓之矣二子又告予以辭其後略補其闕吾儂近雖離風症

幸余一死予嘗有聞之祖翁曰文章者慰老
之起卧俳諧者交人之好惡也何與歟不文
章者慰吾病情之一助焉至愚極陋之累者
免麼角麼唯塞其需以為之跋

定外

寔曆四甲戌春三月



雄橋治梓

明才之大人去逝在
道福お言方、高年
一時の心出、席に
為る、心は、

